

〔調査報告〕

パラグアイにおける伊藤勇雄一族 (2)

—— イグアス移住地での生活と意識 ——

三須田 善暢*

キーワード 移住、伊藤勇雄、パラグアイ、日系人社会

2 伊藤勇雄についての概説——第1世代

2.1 伊藤勇雄について

【パラグアイ移住にいたる経緯】

伊藤勇雄¹³⁾が晩年に外山開拓地を飛び出してパラグアイへの開拓に入った理由の一つには、南米移住数年前におこなったインドへの旅行が一つの契機となっている。勇雄はその旅行で世界的な食料不足を痛感し、「パラグアイは食料生産基地としてとても恵まれている。ここは世界の食料生産の基地になる」と考えたのであった。そのほか、日本国内での開拓に限界を感じていたこともあった。矢巾での経営面積は当時で50a-1ha程度、外山ではそれ以上ではあるが15haほどであった。外山に残った次男は「このままでは農業では生活できない」と感じていたと述べており、実際その後離農している¹⁴⁾。大規模な農業をおこないたいという志向と、働き学ぶ学園を中心にした理想郷を建設するとい構想が、南米移住へ踏み切らせた大きな要因といえる。

当初は関係者を大勢ひきつれての入植を検討して関係者を熱心に勧誘したのであるが、当時すでに日本の経済成長が始まっており外国へ開拓にいく希望者を見つけるのは難しかった。そこで勇雄は自分の一族の一部をつれて1968年に入植することになる(先発隊は1967年に入植)。具体的には、勇雄の妻エソ夫人、三男(A氏)夫妻、三女夫妻、五男(C氏)、六男(H氏)、長男夫妻の長子(G氏)である。長男は矢巾に、次男は外山に残ることになった。成人していた者は、すでに日本での生活基盤を確立しつつあったので、強引に従わされた形となったが、児童は逆に喜んで移

住した¹⁵⁾。

【移住当時の経営状況など】

イグアスでは、勇雄夫婦と五男(C氏)、六男(H氏)、孫(G氏)で一家族、三男(A氏)夫妻で一家族、三女夫妻で一家族として分かれて入植した(写真5)。勇雄の家族に入った孫のG氏は当時わずか13歳、両親と離れての移住である。寂しかったのではないかと思いきや、五男は11歳、六男は6歳で小学校入学前であったため、実の兄弟のように勇雄の家族に溶け込んでいたと述べる。勇雄も五、六男のために同世代の子どもを連れていきたかったのだろうとG氏は述べている。くわえて、エソ夫人は以前旅館に勤めていたこともあり料理が上手でおいしかったと述懐している。



写真5 勇雄旧居

開拓当初、入植一家族に対して、国道付近の区画(ロッテ)は30ha、少し奥の区画は50ha、ダム沿いの土地は90haが分譲された。その区画

を開墾すれば、連坦する区画をさらに購入することができたので、開拓が進むにつれて面積を増やせた。勇雄の家は入植して肉牛・乳牛を100頭ほど飼養し、最終的に300haほどまで農地を増やしていった¹⁶⁾。ちなみに、イグアス移住地では特別な公職にはつかなかったが知名度は高く、そのため「出身県の否日本からの期待があまりにも大きい」、「従って……何よりも早く自分の営農の可能性を具体化して、……人々に示さねばならない責任を感じておられるものと思う……。そこに自家の経営から手を離されない理由とあせるというものがあるのではないか」との指摘もある（岩手県1972：100）。

勇雄家はこうして順調に開拓に従事していった。ただし移住後も病氣療養や講演で日本に数度帰国しており、日本との関係は持ち続けていた。1974年の暮にはブラジルの弓場農場（農業を中核として芸術・文化活動全般をおこなう一種のコミュニティ）を視察にいった。勇雄はそこで病に倒れ翌75年正月に客死した。享年76歳であった。遺言には「私の南米に於ける施策は僅かである。しかし私の生涯は敗北ではない。勝利である」と記されていた（相田2003：512）。学校をつくり理想郷をつくるという目的は、彼の生存中は実現できず、息子たちに引き継がれた。遺骸はブラジルで埋葬されたのち10年後にイグアスへ移され墓が建てられた（写真6）。そこには2番目の妻の骨も日本から分骨されて入っている。



写真6 イグアスにある勇雄の墓

【勇雄の死去後】

勇雄の死後はエソ夫人が人夫を雇いながら農場を管理していった。死去当時五男のC氏はまだ高校2年生、六男のH氏は中学1年生。孫のG氏は小学校を卒業後、農業を手伝っていた。その後、C氏は働きながらアルゼンチンの大学に通い、学校の休みには戻って農業の手伝いをする。H氏は学費をためるためにアルゼンチン、パラグアイのアスンシオンでそれぞれ1年間働き、その後JICAの仕事に従事しつつ夜間の大学（アスンシオン大学）へ通い哲学と教育学を学び、日本にも留学（玉川大学、岩手県立大学）して情報教育についての博士号を取得している。G氏もC氏のすすめによりC氏と同じアルゼンチンの高校へと進学した。G氏を除き、勇雄家の子どもは農業以外の仕事につき、農業を継承しなかった。そのため、現在は他の親族が勇雄の農地を管理することになっている¹⁷⁾。なお、エソ夫人はその後隣接の入植者の日本人男性と再婚している（相田2003：513）。これは、一人で生活する母親を慮ってC氏やG氏が勧めたためでもあった。その後再婚相手も亡くなり、近年は首都アスンシオンでG氏の娘3人らとともに生活していたが、2012年5月に92歳で死去された。

【その他のエピソード】

今回の訪問で聞き取った勇雄のエピソードをいくつかあげておこう。勇雄が戦後に政治活動を止めた理由はエソ夫人の回想によると「金もかかるし、納得しないことも妥協しなければならない。それで政治から足をあらった」ためである（C氏談）。また、彼は当時日本社会党の議員であったが、思想としては社会主義よりもトルストイの博愛主義の影響が強い。また、宮沢賢治（勇雄と同年代）については好いていなかったようで、「賢治は駄目だ。実践的なものをもっていない」と述べていたという（エソ夫人の回想。C氏談）。勇雄の生き方はまさに「雨ニモマケズ」の生き方を実践するかの如く的生活であった（たとえば、朝4時に起きて大志田の駅から外山まで毎日10km

ほどの道をどのような天候でも通年歩いて通い開拓に従事した、等)。「実践」の自負が賢治に対する評価となっている。なお、勇雄は日ごろ般若心経を唱えており、外山開拓時代から、不幸の際に勇雄が読経することもあった。パラグアイへ移住後もそうした宗教的な志向は変わらず、開拓地にいたカトリック神父(フォアキム師)とも親しかった。

もう一つ、C氏から聞いた出来事をあげておこう。C氏が子どもの頃に勇雄と一緒にラジオを聞いていたところ、「今日、川に飛び込み子どもを救った伊藤勇雄さん……」というアナウンスが流れた。「これ、お父さんのこと？」と聞いたら「そうそう」といって、それ以上何も言わなかったそうである。

3 第2世代——年配の子息

3.1 A氏

【生活史】

勇雄の三男A氏(2011年で68歳)は、イグアス日本人会会長を近年まで務めた開拓地のキーパーソンである。「美隆(みたか)」地区に妻と娘と居住している。TV番組『移住』にも描かれているように(相田2003:520)、A氏夫妻は移住当時盛岡で左官業をしており、他の多くの兄弟と同様南米移住は反対だった。しかし勇雄の説得により先発隊として入植することになる。「家を買って基盤を固めていた友達と違って、新婚ホヤホヤだった僕が、父に言われてみんなより1年早く先発隊として送り込まれました。言葉も分からないし、電気もないランプ生活ですから、最初は困りました。でも、森に鉄砲持って入って動物をとったり、魚を釣ったりして生活しているうちにだんだん楽しくなり、『まんざら悪くないかも』と思うようになりました」¹⁸⁾。

このように述懐しているA氏である(事実、A氏はシカ、バク、ヒョウなどの野生動物の狩猟をおこなっていた)が、入植当初実は大変な苦労を経験している。まず入植当時A氏夫妻と三女夫妻は一緒に生活をしていたが、2年後に川の

そばに家を建てて独立する。その頃、自然草地(カンポ)に共同で牛を飼うことになり、その管理人になった。しかし、運悪く夫妻ともども1年間おきにマラリアにかかってしまった。飼養中の牛も弱ってきて、そのうえそこが洪水に襲われ家が流されてしまう(幸運にも勇雄家の場所は水没しなかった)。他人の助けを借りてどうにか別の場所に牛やニワトリ等家畜を避難させたものの、長男のB氏を産んだばかりのA氏夫人(葛巻出身)は「日本に帰りたい」と弱気になった。そうしたなかA氏は、もう少し待ってくれと頼み、多くの作目(メロンや大豆など)に取り組むなかで活路を模索し、どうにか今日まで生活を続けてきたのである。A氏は日本へ戻ることは考えなかったが¹⁹⁾、多くの知人は途中でイグアスを出ていった。そうした人たちとの付き合いは現在ではごくわずかである。

入植した家族が困難にあった際、当時海外移住事業団や農協からの生活支援は十分ではなかったというのがA氏の実感である。特に大変だったのが、為替レートの変動による金利の上昇で、一時期38%ほどにもなって借入金の返済が困難になった。「1ドル360円が180円になり、1ドル7500-7600グアラニー(Gs)くらいになった」。借金の相手先は事業団からが多く、A氏もたびたび借金(およびその借り換え)をおこなっている。借りの名分は牛の繁殖のためとしていたが、実際は開拓のための伐根費や大豆栽培の機械代などに回していた。借金にあたっての保証人は一族の者が相互になった。こうした借金は、1990年代以降大豆を作り始めてから返済できるようになる。

そのほかの苦労は、現地人との関係の問題である。A氏はじめ伊藤一族は入植当時に地元の学校へ通いスペイン語を勉強したが、A氏いわく自身のスペイン語能力は日常会話程度だと述べている。そのため、金銭の絡む複雑な契約では日系農協やパラグアイ人を間に介して行うようにしているが、それでも現地人との間で詐欺や労働問題などが多発してきた。こうした経緯が、後述する

現地人への否定的感情につながっている。

A 氏夫妻には子どもが4人いる（男子3人、女子1人。うち1人は死去）。健康が優れない子どもがいたこともあって A 氏夫人は子どもの面倒が生活の中心となり、それだけで精一杯であった。ある時期から、娘が同居しはじめた最近に至るまで現地人女性をメイドとして雇っており、現地という「パトロン」の立場となっていた。A 氏夫人は「[当時の入植者の女性] みんな『奥さま』になってしまった」と述べる。しかし、A 氏夫妻が裕福な生活をしてきたということでは必ずしもないであろう。これまでの苦労をうかがおうとしたが「昔の苦労を聞かれても、もう過ぎてしまったことだからどうしようもないわ」という返答であった。

なお、A 家の家屋はその後ダム建設のために立ち退くことになり、現在の居住地に移っている（写真7）。その後しばらくして、長男 B 氏の小学校通学のために市街地（現在 B 氏一家が住んでいる場所）へ移り住んだのであるが、B 氏らがアルゼンチンの学校に通っていた頃に大豆を栽培するようになったため、作業の効率性を考えてあらためて圃場の近くの現居住地に戻っている。



写真7 A 家の住居

【農業等について】

入植当時の作業は開墾であった。まず樹木を抜根し、乾燥させて後、山焼きをする。畑として使えるようになるまでには1年ほどを要したが、開

墾後2-3年間は施肥料せずとも相当量の収穫となった。入植当時は現地人を抜根の人夫に使ったので、かなり早くに抜根することができた。人夫はその後も継続して、抜根のほか苗の植え付けや収穫等に短期間雇用しており、多いときで10人ほど使っていた。息子の B 氏も一時期までは人夫として家の農業を手伝っていた。

当時から農業経営の中心は畜産（肉用牛）である。A 家では現在、子牛の繁殖が中心で200頭ほどを飼養している（雌牛は購入する）。繁殖牛は原則放牧と乾草の付与のみである。肥育牛も飼養しており（1年間ほどの肥育）、それには半年間ほどサイレージの飼料も与えている。両者計400頭ほどで、そのための牧草地は120haほどである。飼料用にはトウモロコシを大豆畑（70haほど）の裏作として栽培しており、そのほかエンバクも栽培している。おおよそ4年循環での輪作である。しかし、飼料のすべてを自給することはできず一部を購入している。育てた牛は地元業者へ出荷している。一時期、ヒルトンホテル用に国外へ出荷しようとも考えていたが、近年ドル安になったため中止した。

A 家ではその他に、ニワトリ飼養、野菜や果樹、穀類などの栽培もおこなった。初期におこなったのがメロン栽培である。当時の隣人がたまたまメロンを作るといので、A 氏も共同で栽培することにしたのである。そうしたところ結構な値段で販売できたため、10年以上にわたり2haほどでメロン（日本の品種で、商品名サンライズ）を栽培し、農協を通じてアスンシオンに出荷していた。もっとも、その後供給過剰になり値が下がり出荷せず捨てるといったこともしばしばあった。

その後、1980年代初頭からは大豆の不耕起栽培を開始した。最初の年のみトラクターで耕し、その後は不耕起である。この栽培は大きな成功をおさめ、大豆1作の利益でそれまでの借金のほとんどを返済できたほどであった。このとき A 氏は攻勢をかけ、大豆栽培を100haほどにまで拡大し、トラクターおよびアタッチメントを購入している。この当時は、大豆栽培を目的としての資



写真8 A家の養魚場

金借入はまだ難しく、そのため畜産用の名目で銀行やJICAから資金を借入したとA氏は述懐している。組合組織をつくっての借入であり、購入した機械は共同利用であった。現在は70haほどの作付け（所有地の約1/4）で、最盛期は大型トラック1台分くらいを出荷するほどの収量となっている。大豆栽培が軌道に乗って以降、A氏は野菜やメロン栽培はやめている。日本でよくみられるような家庭菜園での野菜栽培もしていない。大豆栽培に用いる農薬の飛散のためうまく育たないからである。

大豆以外の穀物としては、小麦、エンバク、トウモロコシ（大豆の裏作）を栽培している。小麦は15年ほど作っているが、霜にあたったり病気になったりで栽培が難しく、順調な収量が見込めるのは10年のうち2回くらいである。それゆえイグアスで全面積の小麦栽培をする人はいない。なお、A氏は以前バナナも栽培していたが、これも霜のためやめている。イグアスには霜のたつような寒い日も幾日かあるのである。

そのほか特殊なものとしてA氏は養魚をおこなっている。ただし養殖した魚は、人夫が食べてしまったり、獣が食べたり湖・池から逃げたりするため、いまだ市場へ出荷したことがない。それゆえ趣味に近いものとのことであるが、A氏はイグアスで最大規模の養魚家である。イグアスに養魚家は他に2-3人おり、「イグアス養魚研究会」もあってA氏も加盟している（会員自体は22、

3人）。勇雄も、外山にいた頃からニジマスや鮭の稚魚を放流するなど内水面漁業を重視しており、A氏が養魚をおこなうのはその影響もある。現在、A氏はダム湖や池（20m×40-50mくらいの池が4つほど）にティラピアという草魚類の魚や鯉を放している（写真8）。それぞれ1000匹ほどを購入してきて11-12月に放流する。

【人夫・メイド、現地人に対して】

現在A家で使用している人夫は7-8人で、小屋住みと通いがあり、うち1人は19年間も通っている。特にカウボーイ（「カパタ」と呼ぶ）の人夫は夜も牛の監視をする必要があるため農場の小屋に住み込んでいる。一般的に人夫やメイドの住居も雇用主（パトロン）が用意するが、その住居は日本人住居に比べると格段に粗末である。A家の人夫小屋は4つほど（勇雄の旧居も人夫小屋となっていた）であり、そのうちの1つを概観したがシャワーは備え付けられておらず、体は屋外で水で洗う（写真9）。グアラニー人ならばそうした環境でも不満を（露骨には）述べないというが、ドイツ人（ドイツ人には入植者が多く、人夫になる者もある）やブラジル人人夫の場合はしっかりした小屋とシャワーもなければならぬだろうとのことである。



写真9 人夫の住居

前述したように、入植者の女性の多くは現在メイドをもつパトロンになっている。作業人夫は入植当時から雇っていたものの、メイドを雇うようになったのはしばらくたってからである。A氏夫

人らの世代は、野菜栽培で真夜中の2時ごろから働くといった過密スケジュールをすごしてきた。そのため、子ども世代、特に娘は母親たちが経験してきた苦労を緩和したいがために、経営主の交替後はメイドを雇用する方向に向かったのである。

これらの人夫とメイドが結婚することもある。A家で雇用していたメイドは人夫と結婚したのちブラジルに渡っていった。

A氏のような年配世代の日本人・日系人は、一般に現地人夫を信用していないといつてよい。A氏と同世代のS氏(1958年に来パ。現在はイグアスでスーパーマーケットおよびガソリンスタンドを経営)は次のように述べる。『『ここに仕事にきた以上は俺のことを聞け』、という態度で人夫と接している。日本人はまじめに対応されるとつい信用してしまう。すると相手はそれを見抜く。[不手際や詐欺まがいのことがあった場合、自分は1回目は我慢するが、2回目は騙されない]。S氏のような現地人への否定的態度を、偏見のみによるものと見てはならないだろう。A氏も騙されるなどの被害を実際に受けてきた。人夫から訴えられることも多々あり、裁判では日本人に不利になる場合が多いのである。

【その他】

移住してよかったこと・大変だったことをA氏にうかがうと、「友達から『こんなに大面積をもててよかったね』といわれることかな。無我夢中でやってきたから。大変だった時代はマラリアにかかったことだ。言葉も通じなかったから」ということである。A氏は日本へ戻る気持ちはない。「日本よりこっちの方がいい。こっちの方が暢気だし、日本の天候と体があわなくなった」。食事の面でも、野菜などは日本から取り入れて栽培しているので心配は無い。日常のつきあいは日本人同士がほとんどである。老人会には入っていないが、岩手県人会には入っている。反面、パラグアイ人とのつきあいはあまりない。

A氏における勇雄の影響を聞くと、「難しい。特別こうだから、ということではない」とのこと。

この点は簡単に明らかにできるものではないということであろう。

4 第3世代——40歳代-50歳代の子ども・孫たち

4.1 B氏

【家族構成と農業経営概況】

A氏の長男であるB氏(1968年イグアス生まれ、2011年で43歳)は、現在妻と子ども2人の4人家族である。B氏夫人(1968年ピラゴ生まれ)は日系人の歯科医師で、夫人の母は岩手の北上出身である。B氏夫妻はスペイン語・日本語双方を日常会話で使用している。2000年に結婚し、長女(10歳)と長男(8歳)がいる。子どもたちは、午前中はキリスト教会が経営する私立学校でスペイン語を習い、午後は週2回ほど日本語の学校に通っている。

父母のA氏夫妻からは独立しており、以前A氏が住んでいた場所(市街地)に居住している。敷地は60m×100mほどの広さであり、家屋は平屋ではあるが国道に面しており、ガレージには車が数台あり、犬がいて、広い庭には多くの木々とともにミカンやレモンなどが植えられている(写真10)。宗教は、父親が仏教であるのに対し、B氏夫妻はカトリックである。



写真10 B家の住居

現在、B氏は父のA氏とは農業経営を別個にしており、畜産(肉牛)を主にしている。イグア

スでの一般的な畜産は放牧だが、B氏はそれとは異なり、濃厚飼料を与えるフィードロット方式である。肉牛は繁殖と肥育で350頭ほどで、牧草地は400haほどである。その他に大豆600ha（2010年）とエンバクも栽培している。家からもっとも遠い牧場は38km先にあり、毎日そこまで通っている。農業機械はトラクター140ps×2台、80ps×2台、トラック1台、その他コンバイン、播種機などを所有している。最近、巨大トラクターを9万ドルで新規購入した。購入にあたって補助金はない（かえて税金が1割かかる）。人夫は6人雇っており、メイドも毎日ではないが雇っている。

【生活史】

B氏の経歴は次のようである。小学校は、家から5kmほどはなれた現地の学校通い、同時にスペイン語学校にも通っていた。通学は馬などを利用していた。中学・高校はC氏、H氏らも通っていたアルゼンチンの学校へいった。大学はパラグアイのエステ市（イグアスに隣接）にある農業大学へ通うが、1992年に岩手県費研修の機会があり、これを契機に中退している。ちょうどイグアスで大豆の不耕起栽培がブームになった頃であり、家の農業が忙しくなってきたためでもあった。大学に通っていた1年半のあいだも家の農作業は手伝っていた。1992年に来県して県畜産試験場の肉牛部で10ヶ月ほど研修し、受精卵移植の技術や肉質調査（トレーサビリティ）などを学んだ。当時は、パラグアイでは肉質よりも安価志向の時代であった。また、大豆価格が高騰していたため牧草地が大豆畑に転換されていく時期でもあった。しかしそうしたなかで、B氏は日本研修での肉質重視の経験を踏まえ、肉質重視の畜産を開始したのである。大豆重視の当時、牛にシフトしていったのはわずか2-3戸であり、父のA氏の志向とも異なるものであった。B氏はその他、アメリカのカリフォルニアやイリノイにも研修にいったおり、15万頭の大規模肥育システムや併設のステーキハウスも見学している。

【葛藤と独立】

しかし、良質の肉牛生産を志向していくなか、父のA氏と経営志向についての意見があわなくなっていく。たとえば、B氏は機械化をすすめて大豆作の作業効率をあげたいのだが、A氏は借金による機械への投資に反対する。当時の予定借金額は3-4万ドルであり、B氏は大豆の播種機を更新したいと考えていた。既存の機械の作業効率では1日10ha程度しか播種できなかったため、当時のA家の経営面積（400haほど）では40日もかかってしまい、播種の適期期間内（2週間）に作業が終わらなかったからである。B氏は3年ほどでの償還を考えていたが、父のA氏は強く反対した。

そうしたなかB氏は、2000年に結婚したこともあって、独立を決意する。翌年には借金をして家と農地・機械を購入・貸借した。その結果、B氏はA家でおこなっていた肉牛経営をいったんやめ、再度大豆経営に戻るようになった。130haの土地を借りて大豆をつくり、借地料・機械使用料を払いつつ、3年目から機械や自分の土地を購入しはじめていった。

この親子の世代間葛藤についてB氏は次のように述べている。「移住1世の人は、“人より早く起きてたくさん働く [のが尊い]” という考えだ。しかし [規模が] 大きくなると一人でやることに限界がある。機械を動かすのにも数名 [の人夫] が必要になる。そうすると“人を使う” ことを覚えなければならない」。「2世が求められるのは、1世より稼ぐことだ。1世の人からは『自分たちの時には [開拓に] 斧を使っていたのに、お前らは [機械に頼っていて] 何だ!』と怒られる。しかし自分たち2世以下の世代は、人を使わないといけない。いかにして従業員を育てるかが大事なんだ」²⁰⁾。このように、B氏は、〈自家労働をおこなう小経営〉というよりも、〈雇用労働に多く依存し、経済合理性を重視する事業主〉という性格が強い。A家にいた頃はB氏も人夫同様汗水流して肉体作業に従事していたが、現在のB氏は管理労働が中心の「パトロン」となっている。経

営志向と勤労観の違いが父子の葛藤の一因となったといえよう。

このような葛藤をB氏は独立によって克服しえたわけであるが、その背景には高校・大学時代の外国経験があると述べている。「学校では28カ国からの人たちが来ており、彼らとコミュニケーションしていたことが大きい」。つまり、多文化社会を生きること、別様の見方をすることが可能になった。また多様な友人ができ、その友人の精神的な支援があったという。さらに、日本にいる勇雄の次男の口添えも大きかった。

【1日のスケジュール】

現在のB氏は管理労働が中心である。具体的にはどういう一日を送っているのであろうか。平均的な一日のスケジュールを書いておこう²¹⁾。

- ・5時起床。農機具での作業は人夫に任せて、自分は牛をチェック（週2、3回）。体重計で体重を測る。こればかりは人夫には任せられない。
- ・7時に運転手の人夫が来る。ミーティングをする。
- ・その後朝食（パン、コーヒー、果物）。
- ・朝食後、用事をする（事務作業や、買い物、牛の見定めなど。今は馬に乗ることはほとんどない）。
- ・12時に自宅で昼食。子ども、夫人と一緒にとる。子どもの学校への送り迎えはほとんどが夫人だが、たまにB氏も行う。日本語学校へのスクールバスはない。
- ・1時から仕事。畑まわり、人夫の仕事のチェック（植え付けや収穫時は、B氏も人夫と一緒に夜遅くまで労働する。その時期は交代で24時間連続して作業する。すべての畑に植えるのに8日ほどかかる）。
- ・7時ぐらいで仕事は終了。夜は米飯、味噌汁、ビールなど（ビン1本/日）。その後就寝。

【大豆および農地について】

B氏の農業経営を、まずは大豆作から見ていこう。2010年にB氏は大豆を600ha栽培した（借地150ha、自作地450ha）。しかし2011年は土地の一部を売却する予定である。それというのも、2008-10年にかけて早魃が続いて収量が1/3となり、このままでは購入した土地代金の償還が難しくなるので地価が高いうちに売却しようと考えたからである。7年ほど前に購入した際の費用は1500ドル/haであり、その土地を180ha、1haあたり7500ドルで売却することにした。

その一方で牧草地を200ha購入してもいる。というのも、土地代の値上がりが激しいためである。大豆畑の土地は売却し牧草地は購入するわけである。土地購入の際にはなるべく借金をしない方針であるが、畜産関係については資金借入を続ける予定である。つまり、これまでの土地購入にかかわる借金はいったん整理し、そのうえで所有地を担保にして畜産での借入をおこない、大豆よりも畜産に力点を置いていく方針なのである。

親族から借りている土地もいくつかあるが、2011年に従兄弟から借りていた50haを返却したので、今後の畑作経営面積は380haほどとなる。

このように、B氏は土地についての経営感覚（資産としての感覚）を強く持っている。それというのもパラグアイはここ10年ちかく土地価格が上昇基調にあるからだ。B氏は独立する際に、経済的にきびしいなかでも土地を購入している。金利も10%近くはあったが、土地はそれ以上の値上がりをしてきたからである。「銀行口座がマイナスに[＝借金の方が多く]なっている、大豆のお金はいずれ入る」。「条件の良い土地はいずれ値上がりする」。こういった経営感覚の下で土地を拡大してきたのであった。

イグアスでは大豆は10月に播種し2月頃収穫する。B氏は、連作障害がでないよう計画的に緑肥の大根やエンバクを植え、不耕起栽培をおこなっている。これまでにB氏は不耕起栽培大豆研究会の会長も経験しており、岩手県北上市の西部開発農産の関係者も視察に来たことがある。非

遺伝子組み換え大豆は除草剤を4-5回ほど、遺伝子組み換え大豆は3回散布し、収穫は他人に委託する。最大の経費は肥料代である。農協の肥料が高額でありB氏は独自にリンなどを業者から確保している。大豆の出荷先はすべて農協である。2009年度は早魃の年であったがB氏の成績はイグアス農協管内で販売高第2位、反収第5位であった。このときの平均収量は1200 kg/haだったが、B氏は1900 kg/ha。これでも高水準だが、平年であれば3トンは取れ、2010年は3390 kg/haの反収で、おそらく2位であろう。作付面積は600 haほどなのでB氏の全収量は平年2000トンほどとなる。なお、1位は1500 haほどの作付けをしている大豆専業農家である。

【畜産（肉牛）】

上述のように、大豆栽培では相当の成績を修めるB氏であるが、近年の早魃を経験し、天候に左右されにくい畜産（肉牛）へと力点を換え始めた（写真11）。「短期の危険性ある作物をやるよりも、畜産は売却まで3年かかり長期でできて安定性がある」と述べるように、危険分散と安定性に力点を置いたのである。そもそも、畜産はB氏独立当初の目標でもあった²²⁾。



写真11 B家の牛

はじめは30頭くらいの繁殖用雌牛（2歳ほど）を購入し、共同で飼養はじめたが、やがて個人経営にした。ちょうどいいカウボーイを確保できる目途がたったので、2009年にパラグアイ銀行から資金（総額2億5000万Gsほど）を借りて、

思い切って牛の頭数を330頭くらいまで増やしたのである（当初は父親A氏の飼養している牛を譲ってもらおうと試みたが無理であった）。このとき、農協は牛の購入という名目では資金を貸してくれなかった。そのため、機械購入の名目で借りることになった（この点はA氏の時と同じである）。幸いにも大豆の収入が良かったので1年でこの借金は返済できた。現在年間150頭くらいの子牛を出荷しており、毎年20-30頭の母牛を購入している。今後は牛での収益を大豆等の収益減や土地の借金部分にあてる方向である。

前述したようにB氏の飼養方法は、出荷3ヶ月くらい前に肉牛を囲い込み、濃厚飼料を与えて太らせるフィードロット方式である。以前は濃厚飼料を与えず牧草のみでの飼養であったため肉質はあまり上質ではなかったのである。現在、濃厚飼料用のトウモロコシは自家の畑で作り、大豆カスは農協から購入し、それらでサイレージをつくっている。以前、農協からくず大豆を購入して使用したことがあるが、雑草の種が混ざっていたので購入をやめた。

牛肉の出荷先は業者（エステ市にある食肉業者をはじめ計3社ほど）であり、農協には出していない。出荷業者の経営するスーパーでは、月一金は20頭/日、週末は40頭/日ほどの牛肉が販売されており、B氏の牛も平均週に3-4頭、多い時で週に10頭くらいが売れている。需要が供給能力を上回っている状態なので、B氏は現在の繁殖用雌牛80-100頭をいずれ400頭ほどに増やしたいと考えている。もっとも、そのためには牧草や種牛の確保といった課題を解決せねばならない（種牛は35頭に1頭必要であり、自然交配させている）。出荷のための屠場も牧場内に作っている。現在屠殺の免許は未取得だが、いずれ3-4000頭の規模にまでなれば必要になると述べている。

肉牛生産者の組織としてイグアス肉牛部会があり、B氏は2010年から委員長をしている。大豆ブームのなかで畜産をやめる人が続き、しばらくは活動していなかったのだが、1年ほど前にB氏によって活動が再開された。部会では生育や病気

予防についての情報発信等をおこなっている。現在部会員は26名であるが、実はこれは農協の部会ではなく、農協とのかかわりはない。肉牛生産と農協は、後述するようにあまり良好な関係ではないのである。

なお、イグアスにおける日系人での畜産最大経営者は、農機具会社を経営する社長兄弟であり、約1500haほどの牧場を所持している。この経営者も農協には出荷せず自分たちで国内外に出荷する。畜産以外にも花卉経営、農薬販売などをおこなっており、豊富な資金をもとに住宅街の建設やスポーツ振興（自前のサッカークラブで選手を育成）もしている。他農家からの出荷も受けており、支払いは現金払いである。これに対して農協の支払いは非常に遅い。「こういう人がいるので『農協をやめたい』というが多くなる」とB氏は述べる。イグアス以外には、この兄弟よりも大規模な経営（北部にあるチャコ地区で8年間かけて、牧場を2万haから20万haに拡大）で成功した日系人もいる。B氏はこういった経営者を将来の目標にすえている。そしてその目標実現が可能な条件がパラグアイには存しているのである。

【その他の作目】

大豆、畜産以外に大きく栽培しているものとしては、エンバク、小麦、ナタネ、トウモロコシがある。これらは自家の飼料に使うが、農協にも出荷していた。3年前の旱魃時に大豆が不作となり資金繰りが厳しくなることがあった。そこで、冬期にトウモロコシを相当規模（経営面積の8割ほど）で栽培したのであるが、そもそもトウモロコシは冬期の作目ではなかったので質・収量とも満足なものではなく、出荷するより自家で使った方がいい品質であった（畜産を開始したのはこういう事情もあった）。

エンバクは大豆同様不耕起栽培（除草剤1回散布）。トウモロコシは除草剤1回散布。どんな作物も播種前に一度除草剤はまいている。堆肥は投入していない。

【その他の起業】

B氏の経営のもう一つの特徴は、農業資材の株式会社（Productos Veterinarios）を所持していることである。この企業は、友人のパラグアイ人夫妻（妻は日系人）と2家族で最近設立したものである。販売のルートを自分で持ち、また、いずれ販売店を作りたいという目的から設立した。ちなみに、このパラグアイ人夫妻は農家ではなく前職が学校教師と銀行職員である。B氏いわく、「彼らは自分たちが持っていないものをもっている」、また「意思の共通する人とやった方が成功する」。

その他、不動産運用と植林事業にも興味を抱いている。後述するアメリカのコンサルティング会社に数年前自家の畜産経営を診断してもらったことがあるが、その際、土地を購入してもわずか8年で償却できることが分かった。また、その際コンサルティング会社が指摘したのは植林事業（ユーカリなど）の優位性であったという。B氏は、まだ具体的には動いてはいないが、この二つに長期的なビジネスチャンスを感じている。

【農協との関係】

前述のように肉牛に関して農協は関与していない。ただ、B氏自身は過去5年間ほど農協の理事を務めていた。そのように農協と関わりの深いB氏が長を務める肉牛部会は、なぜ農協と関与しないのだろうか。

その理由には、農協に対するB氏の不満がある。現象面でいえば、手数料等が高い、精算が遅いといったことである。「農協に注文した資材などは、注文の時から利息がとられる。また、農協は全部清算しないとお金を入金してもらえない。これでは資金繰りが困る」。B氏によると、若い世代で農協をやめる人が多いという。

より本質的な面でいえば、農協経営のビジョンが問題である。たとえば、B氏が理事の当時、アメリカのコンサルティング会社に依頼し10年先の農協の将来像を検討してもらったことがある。その時の診断は、サービスを増やし、無駄なものを削るといった方向性を示唆し、「利益率の高い

事業を行っていない」という批判をおこなった。しかし、B氏によると、農協側はその批判を受けとめ方向性に沿った構想を実行する気はなかったのである。また、同じく理事だったD氏とともに、他の農場と一緒に農協主体でプロイラーの雛を生産するプロジェクトを計画したことがある。しかし総会で1票の差で否決されてしまった。これ以外にも理事時代にいろんなプロジェクトを仕掛けたが、急進的変革を望まない理事たちから反対されて積極派のB氏らの意向通りには進まなかったのである。B氏いわく「これではいずれコチア農協（＝ブラジルの日系農協で破綻した）のようになる」とする。

【人夫】

B家で現在使用する人夫は、畑ではオペレータに2人、手伝いに1人、牧場ではカウボーイに1人、フィードロット用に2人である（牧場は1家族を雇う。49歳の男性と若い息子がいる）。彼らは月給雇である。給与はそれぞれ異なり、牧場の家族に対しては、父親に150万Gs（約3万円）、息子に100万Gsを払っている。人夫には家を貸している（家賃はない）。ただし電気は通っており自家発電である。冷蔵庫などの家具も貸しているが、そこまでするパトロンは珍しい。このように、人夫を大事にする点がB氏ら若い世代の特徴かもしれない。

人夫は、たいていはパトロンとの関係がうまくいかず移動することが多く、人夫自身も好条件のパトロンへ移ることがたびたびである。良いカウボーイを探すのは結構大変であり、それゆえカウボーイに対してはそれなりに気を使っている。たとえばB家では農耕用の馬も飼っているが、これはカウボーイの為に購入したものである。カウボーイは馬が好きで、以前競走馬を飼養していたこともあり、「働いてもらうなら好きなものを買ってもらおう」と考えて、経費はかかるが購入することにした。

A氏のところで出された現地人夫に関する否定的態度を、B氏は持っていない。B氏も以前、

特に大豆栽培を開始する前は人夫との問題が多々あったことを承知している。だが、今はB氏たち日系人も労働問題を勉強しており、何かあれば弁護士たちを雇って解決するようにしている（＝弁護士との契約をしている）。くわえて、雇用時には契約書を作成するようにしており問題が発生しないよう注意している。「1世の人は人夫に対して確かに冷たく、信用していない。『一緒にテレレ（＝冷やして飲むマテ茶）などに飲むな』ともいわれている。騙されるなど、皆がいう。しかし自分は違う。人夫とコミュニケーションを良くして畑の管理のことなどを伝えて、忙しい時も頑張ってもらい、終わったら皆で焼肉をやったり、少しはボーナスを出したりしている」。ちなみに、日系人を人夫として雇うことはない。

【地域との関わり】

B氏（および後述のD氏）の特色として、「地域振興協会」との関わりも述べておかねばならない。この組織はイグアス農協内にできたもので、そこでは3年間の期限付きプロジェクトとして「パラグアイ南東部小規模農協強化計画」というものを実行している（2006-8年）。この計画は、イグアス農協、日系農協中央会（FECOPROD）、INCOOP（農協を監視する機関）、JICAらが協働して、パラグアイ人の小規模農協を応援するプロジェクトであり、B氏は設立から3-4年間ほど関わっている。

前述したように、移住1世は現地人に対して強い否定的態度をもっているが、2世らはそうではない。特に後述のD氏は、現地人の話すグアラニー語にも堪能であり（B氏はあまり得意ではない）、現地人の友人も多く地元の評判も高い。D氏やB氏が中心となって、現地人のための計画を実行したのであった。

具体的には、パラグアイ南東部にある12の小規模農協およびまだ農協として体をなしていない集団に対して、日系農協が支援をするというプロジェクトである。イグアス農協は、アルトパラナ県のマジョールキン農業者協議会（ここはまだ組

合化していなかった)とタバプⅡ農協(ここは政治家が農民票をとるために結成した農協だが、実質的な活動をしていなかった)の農協を支援することになった。

タバプへの支援を紹介しよう。この農協は「ジェルバ」というマテ茶加工の工場を持っていたが、これが火事で使えなくなっていた。そのため、組合員数が80から10に減少し、共同活動に関心を無くしていた。そこにイグアス農協が工場再建のための資金を融資したのである。その際重視したのは、意識改革と技術サポート、組織運営のサポートであった。月1回のワークショップを何度も重ねて、講演や勉強会もおこない、イグアスのCETAPARでの泊まり込みワークショップなども実施した。工場再建の融資はイグアス農協から出し(3年償還)、それ以外に農家の運営資金として短期融資もおこなった。B氏いわく「相手が何が欲しいのかを知り、コミュニケーションを積み重ねてきたのが成功につながった」。結果として、イグアス農協の支援した農協はプロジェクトのなかでもっとも顕著な変化を示し、そのため、JICAがプロジェクトから撤退した後も、ひきつづき中央会などの別経費で支援をおこなうことになっている。

【イグアスでの生活の苦勞】

このようなイグアスでの生活について、B氏の自己認識としては「[自分は]浮き沈みの激しい人生を送っている」と見ている。これは、B氏と父との関係も影響しているが、周囲を見ると必ずしも成功者ばかりではないこと、また大豆が成功するまでの苦勞、大豆成功後も天候の不順による問題などの、農業を取り巻く環境の変化からの認識であろう。くわえて、B氏は楽しみ(レジャー)が少ないことも指摘する。「農業ばかりで楽しみがない。友だちと酒を飲んだり、バーベキューをしたりできるようなところもない。移住地にレジャー的なものをつくろうとしたことがある。自分が暇なときに、湖のそばの景色のいいところを少しずつ変えようとした。湖のほとりでキャンプ

したり、ジェットスキーを友だちと一緒に購入したりした」。B氏はイグアス農協青年部長を務め(1994-5年)、青年のレジャー活動の向上に取り組んでいたのである(なお、日本人会にも青年部はある)。しかし、B氏によると現在は個人のことを考える風潮が強くなり、集団活動は停滞していて不安であるという。結婚後は、家族で一週間ほどブラジルのビーチへ行ったり、中・高の友達が多くいるアルゼンチンに遊びにいったりしている。

【勇雄の影響および周囲からの期待】

B氏は父のA氏から勇雄については特段聞かされてはこなかった。しかし岩手県にいたときは、勇雄の理念について周囲から聞かされた。とはいえ、強い影響を受けたわけではない。勇雄の記憶もあまり持っていない。ただ、今になってみると「『三歩すすんでいた人』だと思う」。昔はなかなか理解できない人であった、という印象を持っている。

父を通じての影響はないのだが、「伊藤家」の一族ということによる周囲からの期待を、B氏はかなり感じている。つまり、単に個人的利益を考えるよりも公益的なことを考えるべきだといった期待である。そのことは理解しつつ、また、前述したような小規模農協支援の活動をおこないつつも、その期待にこたえる大変さをB氏は口にした。

【その他】

B氏夫妻に、「子どもが日本人以外と結婚したいといったら賛成するか?」という質問をしたところ、「それは仕方ない」とのことであった。伊藤一族は国際結婚が多い(B氏の弟、G氏の妻はパラグアイ人であり、C氏の元妻はアルゼンチン人、H氏の妻は台湾出身等)。1世には反対する人が多いであろうが、おそらく国際結婚は進展していくと思われ、2世以下の意識もそれを反映しているといえよう。

4. 2 C氏

【生活史】

C氏は1956年勇雄の五男として外山・御料牧場で生まれ、7歳で岩洞湖畔に引っ越した。六男(H氏)はそこで生まれている。C氏は勇雄が59歳の時の子どもである(H氏は65歳の時の子ども)。C氏いわく、「自分は勇雄にかわいがられた。逆に母のエソは“弟がかわいそう”というのでHをかわいがった」。

日本にいたのは小学校5年生までで1968年に来パした。南米にいくと聞いた時、C氏は勇雄から「バナナやパイナップルが食い放題だ。広い牧場を馬に乗って銃を撃てるぞ」などと聞いて大いに喜んだそうである。当時日本ではパイナップルなど一生に一度食べられるかどうかという時代であった。日本の友だちと離れてさみしいという気持ちはなかった。

イグアスではオートバイで小学校へ通った。パラグアイではオートバイを購入するのは難しかったため、それは勇雄が日本から持ち込んだものだった。勇雄の危篤時、電報を受けて母とブラジルへ行くのだがビザがとれず、国境(「友好の橋」)で立ち往生することになった。「お父ちゃんが死にそうなのはどうすんの!」とエソ夫人から一喝され、しかたなく入管裏から「密入国」することになった。勇雄死去後はC氏は働きながらアルゼンチンの大学に通い、JICA関連や日本大使館関連の仕事に従事していく。しかし、C氏はJICAの仕事があまりにも給料が良すぎることに違和感を覚え、その後JICAの仕事を辞めている(2002年までは国際協力専門員であった)。近年は企業等からの依頼で国際協力関係の仕事を中心に世界を飛び回っている。

【勇雄の影響、および教育歴】

C氏における勇雄の影響はどういうものであったのだろうか。

C氏においても対面状況の下、口頭で思想を伝えられたというものではない。ただ、パラグアイにいたときは、親子で毎日開墾に従事していたた

め、常に勇雄は子どもたちのそばにいた。「ベタベタと甘えていたわけではない。手をつないで引かれたこともない」が、いまから思えば愛されていたとC氏は述懐する。日本にいたときも、盛岡にはよく同行し、東京にも連れていってもらった。しかし、勇雄は自分のことに夢中になると子どものことに目がいかなくなる人だったため、しばしばはぐれてしまい迷子になった。

勇雄が教育問題にこだわっていたことが、C氏の教育歴、思想にも影響を及ぼしている。勇雄の夢の中核は、「人種による差別もなく、誰もが働किながら学べる学校」(相田 2003: 512)を中心とした理想郷の建設であった。それは勇雄によって「人類文化学園」と命名されていたが(写真12)、その学園は彼の死後、C氏を中心とする親族によって地元のための小学校「青い湖の小学校」として1986年に設立されることになった。この学校は親族たちが費用と労働を負担して自分たちの労働で建てたものである。すなわち、A家前の倉庫を教室にして、コンクリートの土台は三男が担当し、A氏とD氏の父は大工・左官業だったため建築と内装を担当し、C氏はパラグアイ文部省の認可をとる(1988年)といった具合であった(相田 2003: 513-8)²³⁾。これまでに50-60人がこの小学校を卒業しており、G氏の娘らも卒業生である。

しかし、C氏は勇雄のこうした夢については生前は知らず、死後に文献や計画書を読んで知った



写真12 人類文化学園看板(後方が学校建物)

という。勇雄の書いた著作を読んでいくうちに、一族が移住したのは父の夢を実現するためであったことを理解し、勇雄は学校を建てたかったのだということを知った。生前は父のことなどあまり知らうとは考えておらず、反抗心は持たなかったがややうさく思っていた。父の想いを知り「なぜ生きているうちにこういう話ができなかったのだろうか」と後悔したとC氏は述懐している。

こうした勇雄の志のほか、C氏自身の学校教育上の体験も、大きな影響をあたえている。C氏はパラグアイに来て地元のスペイン語小学校に入ったが、学校のレベルがとても低く、「この学校に通っていたら遅れた人間になってしまう」と心配になった。詰め込み主義で暗記だけさせるような教育であり、また、教師（女性）も教育より自分の生活を重視する人間であった。たとえば、ある日校庭にアルマジロが歩いていたら「アルマジロを捕まえてこい。私の晩御飯だ!」といって捕まえさせられた。その他、ときどき晩御飯の買い物にも行かされた。日本にいたときの教師、特に外山の小学校の担任が教育熱心で生徒をかわいがってくれたのとは対照的であった。パラグアイで日本とは異なる教育を体験して、C氏は「こんな教育でいい社会が築けるのだろうか」と不安になり、いい社会をつくるためには学校を作る必要があること、そうしないと自分もこの国も双方よくはならないということを、小学生在学中に考えるようになったのである。勇雄にも「パラグアイの教育はダメだ。俺が文部大臣にでもならないとだめだ」と話したことがあるが、そのときの勇雄は嬉しそうに笑っていたという。こうした経験が、「いずれ学校をつくろう」という、後述する勇雄と連続するような夢につながっていく²⁴⁾。

C氏は中学校は首都アスンシオンにいき、日本人のために作られたミッションスクール（アドベンチスト系の学校）に入って寮生活を送った。中学生時代にC氏はアドベンチストの洗礼を受けている。洗礼に対して勇雄は反対しなかった。「父ちゃん、俺、神様いるかもしれないと思う」といったところ、勇雄は「俺も若い頃はキリスト教の洗

礼を受けたんだ」と返事をした。

しかし、中学時代、スペイン語の勉強は不十分であった。日系人の学生寮に住んでいたためもあり、これではスペイン語は身につかない、環境を変えねばと思っていたところ、勇雄からは「中学を出たら自分が教育するので家の仕事を手伝え」といつてきた。だがC氏は「百姓の親父に教えられるのは百姓だけだ。これは危ない。将来学校を作ろうとするのであれば中卒ではまずい」と危機感を抱くことになる。実際、一緒に日本から来たG氏は、学卒後は家で農業しかしていなかった。そこで、勇雄も納得してくれるような学校を探してみると、アルゼンチンに働きながら勉強できる全寮制の高校（アドベンチスト系の学校）が見つかったのである。勇雄にこの高校への進学のを伝えたところ、働きながら学ぶという趣旨に賛同し進学を許可してくれたのである。

この高校は、午前中授業をして午後労働をするという日課（養鶏場や牧場を備えており、パン工場などの加工場も備えていて食料は自給する方針）であり、希望すれば学費全額分を労働でまかなうことも可能であった（登録しておく、学校側から仕事を紹介してもらえた）。C氏は夏季休暇中3ヶ月ほどを働いて費用をためている。C氏は木材伐採、通訳などをおこなった。当時通訳をすると1ヶ月で1年分の生活費を稼ぐことができた。半分は家に納め、半分（7-800ドルほど）を学費にあてた。結果的に、B氏、G氏、D氏の姉など、親族の大勢がこの高校へ進むことになった。

大学も同じくアドベンチスト系のアルゼンチンの大学（Colegio Adventista del Plata）に進む。勇雄死去後、C氏は神の存在について考えるようになっており、大学は神学部および教育学部に進学した。2コース・6年間を要する課程であったが、勉強は若いうちにやっておかないといけな、仕事はいつでもできるだろうと考えていたためこのコースを選択した。しかし結果的にC氏は大学を卒業しなかった。在学中から仕事（通訳やJICA関係のプロジェクト）が多々入ってきてしまったこと、また、この当時、宗教家になろう

とまでは考えていなかったことがある。C氏としては、自己の信念に忠実に生きて、社会の役に立つ人間になればいいと思っていた。であるから、宗派の違いは関係がなく、勇雄のように宗教にこだわらない生き方に、たとえば無教会派などに魅かれていくことになった。しかし、そういう態度をとりだしたことで、くわえてアルゼンチン人女性と結婚したことにより、C氏が師と仰ぐ日本人牧師から破門されてしまうことにもなった。こうした経緯を踏まえ、結局は神学部を修了した頃にアドベンチスト派からは離れていく。

【C氏の夢——産業活動と一体化した学校経営】

前述のように勇雄の志とC氏自身の教育体験を踏まえて、理想の学校をつくらうという夢が育まれていった。それは、その後の国際協力の仕事のなかで実現化されていく。

C氏の高校進学に際して、実は勇雄もそのアルゼンチンの学校へ見学にいっている。その際、「[この学校のシステムは]生産が弱い。あれでは学校の経営が維持できないだろう」という感想を勇雄が述べたとC氏は述懐している。この学校は運営費の半分ほどを学費でまかなっていたが、勇雄の理想は学費無料で通える学校を考えていた。そのことが生産面の弱さという点を注目させたのであろう。この勇雄の感想に触発されて、学校経営をいかにするか——できれば学費無料で——がその後のC氏の課題になっていった。そのためには学校での産業活動をしっかりせねばならない。いいものをつくって販売を増やさねばならない。そこで、その後アルゼンチンの学校における産業部門をC氏はすべて視察していった。

その結果、現時点でのC氏の基本姿勢は、高等教育では産業教育（含農業）を重視し、地域に加工工場を作り仕事を増やしていくこととセットで、学校経営を考えるというものである。学校のみを作っても経営基盤が弱い。学校で育てた人材が地元で就職し、そこでの生産物が諸外国に輸出されるということまでを考えないと、学校の存続が難しいというわけである。別言すれば、産業面

と一体になれば「パラグアイ人でもできる」。先進国ですすめられているような高等教育の無償化は、パラグアイでは財政的に難しい（パラグアイはまだいい方で、アフリカ諸国にはそもそも学校がない箇所も存在する）。文部省の予算を当てにすることはできない。となると、公立教師よりも私立において良質な教師を確保・養成していかねばならない。そのため、私立のレベルで経済的負担のない学校を、ということになる。

こうした基本姿勢は、C氏がJICAで学校づくりと関連しての職業・人材育成などのプロジェクトを7校ほど手がけた（3件ほどはコーディネーターを手がけた）経験からも構想されている。これは、単なる思いつき、「絵に描いた餅」とはいきれないだろう。例えば最近のものであれば、現在日本大使館から日本での介護従事者をパラグアイの日系人から出せないかという依頼がC氏のもとに届いており、それと連関させた教育プログラム案を立てている。介護従事希望者（3世、4世が主）は、（教育学専攻のH氏とかかわりのある）日本の大学で日本語を学び、仕事は（C氏の知り合いの）介護事業参入予定業者（マンション管理会社）で研修をうける、といったプログラムである。

この案はまだ実現化はしていないが、初等教育においてはC氏は実際に初等学校を3箇所をつくっている。(1)一つはパナマで働いていたときであり、いじめにあった自分の子どものために別の学校をつくらうと有志に呼びかけて、2ヶ月で小規模のものを設立し、文部省にも認可された事例である。場所は教会のキャンプ場を借り、教員募集には4名の応募があった。C氏いわく、「規模は小さくてもいい。マンゴーの木の下での授業でもかまわない。大事なのは習いたいという子どもと教えてやろうという教師である」。(2) C氏らがイグアスにつくった「青い湖の小学校」もそのようなものであった。設備は手作りのものであり、教員も、初年度はA家人夫の中で農学校（中学校レベル）をでた人が務め、翌年からはボランティアが務めた。人夫やカウボーイ、隣近所の人から

の「学校もないといけない」という思いから設立されたものである。(3) ブラジルで働いていたときも学校を設立している。当時のC氏の助手(女性)が、C氏を通してJICAへ要望したのである。日本大使館の関係者を集めて検討したところ、1000万円までなら大使館がお金を出せることになった。そこでC氏が構想を練り、2階建ての校舎を建設し、日本語教室やコンピュータ教室などをおこなう学校を設立したのである。

学校づくりは勇雄の考えていたことであるが、「親父の夢だからでなく、自分もそれと同じ目的だからやるのだ」とC氏は捉えており、いままでの仕事で経験してきたことも半分以上はこうした夢につながることであったと思っている。いまや学校設立に「使命感のようなもの」をC氏は感じている。とはいえ、長いこと一族の一部からはC氏の構想は理解はされなかった。他の兄弟たちは、それぞれの家の経営が大変だったからでもある。

【農業について】

現在、C氏は農業には従事していない。農地管理は他の親族に任せており、将来勇雄の農地300haの半分ほどは、彼の夢である学園のことに使いたいと思っている。

農業には博打的要素があるとC氏は述べる。同じ作物でも年による価格、販売数量が激しく変化し、どうしたら安定させることができるのかで苦心するからだ。対応策は、多角経営と販路拡大であろうが、問題の大本には、パラグアイの国内市場が狭いことがある。敷衍すれば栽培・生産・流通等の全過程を自分たちが繋いで保持していく必要があるということになる。こう考えていくと、上述の構想に基づく学校をつくるためには、生産体制だけでなく、レストランやスーパーなどの流通・消費・サービスの方面も整備し、発達させる必要があるとC氏は考えている。

【その他】

最近のC氏の関心はコミュニケーションの問題やスピリチュアリズムである。勇雄が死去した弓場農場も、勇雄が若い頃入った「新しき村」も、C氏によれば閉鎖的すぎるコミュニケーションである。弓場農場についてC氏と勇雄は次のような対話をしたことがある。「弓場は共同社会の理想ができていると思う」(C氏)、「うん、そうだがあそこは民族主義的だ。日本人だけだ」(勇雄)。武者小路は多民族がまざりあい万国の人が暮らせるのが理想だと述べてはいる。しかし、実際にC氏家族が埼玉にある「新しき村」に入植しようとしたところ(2002年)、子どもの日本語が不自由であったため入植に難色を示されたという。武者小路や勇雄らが理想とした多民族性をC氏も追求しているのである。

【付記】

本稿は「パラグアイにおける伊藤勇雄一族(1)」の続きである。事情により本稿では完結せず次号に続く。前稿執筆後に、勇雄娘婿の福井勇氏ご逝去の報に接した(2013年2月)。イグアス移住の第1世代が亡くなっていくことを悲しく思う。ご冥福をお祈りしたい。

【注】

- 13) 本稿では伊藤勇雄についての伝記的紹介は割愛する。簡潔な紹介としては三須田(2011)を参照されたい。
- 14) 相田(2003:498)によると、パラグアイ政府からの移民継続要請にこたえて立案された「パラグアイ東北村構想」(岩手県提唱)が新聞に掲載され(1965年11月6日)、その計画を知ったことも要因とされている。
- 15) この点はドキュメンタリーTV番組『移住』(1962年、NHK製作)に如実に描かれている(相田2003:519-20)。
- 16) ただし岩手県(1973:134-5)によると、1971年の時点で土地は100haで、肉牛40頭、乳牛2頭、豚10頭、鶏13羽となっている。
- 17) 勇雄の農地180haほどのうち、B氏が50ha、D氏が80haほどを耕作している。
- 18) 『ニッケイ新聞』2011年9月2日。
- 19) 大きな病気の治療に際しては日本に戻っている。また、A氏夫人は、ブラジル日本人会の有志とともに皇居への奉仕活動に参加している。ちなみに、現天皇は

皇太子時代にイグアス移住地を訪問している。

- 20) ここでいう「移住1世」の勤労観は勇雄にも共通している。勇雄の次男は、勇雄から「人より草取りの回数を増やしてたくさん働くから反収が増える」といわれたときに、「人より多くの時間をかければたくさん取れるのは当然だ。俺はそんなの [= 農業の仕方] はいいやだ」といい返して、悶着になったことがあったと述べている。
- 21) 10年以上前の一日のスケジュールは、次のHPに記載されている (<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Oak/4700/victor.html>)。この頃は人夫も少なく、B氏も人夫同様に働いていた。
- 22) その他に、その当時に国際協力事業団パラグアイ農業総合試験場農 (CETAPAR) で研究されていた研究成果に刺激されたこともある。それまでの常識では牧草地2haに牛1頭しか育てられないといわれていたのだが、大豆を育てていた農地は牧草の成長率が良好で10頭/haの飼養が可能という結果がこの試験場から出された。B氏はこうした結果を見て、大豆栽培よりも興味を持つようになったと語っている。
- 23) ちょうどC氏がJICA関係の仕事でアスンシオンにて働いており、パラグアイの文部大臣と話す機会をとらえて交渉した結果、正式な認可を得て教員2人分の予算がついた。とはいえ、その後の経緯は順風満帆

とはいえず、教師が途中でいなくなったり、役所が教員予算を他のことに回してしまったり等の問題があった。2010年はよい教員が見つからず一時休校になっている。なお、授業は月一金で、教員は月曜日に出勤後金曜まで宿舎に泊まる。宿舎は勇雄の旧居を使っている。2011年現在で教員は1名。現在もう1名を探している。なお教員は雨天の日は出勤しない。

- 24) 弟のH氏も教育学関係の博士号を取得しているが、そこにもこのような幼少期の経験と兄であるC氏の影響があった。

【文献】

- 相田洋, 2003, 『航跡 移住31年目の乗船名簿』日本放送出版協会。
- 岩手県, 1972, 『南米パラグアイ国移住地の現状——特に岩手県出身移住者を中心に——』。
- 三須田善暢, 2011, 「書評 大久保好唯著『移住——人生最後の夢をジャングルの開拓に賭けた男——伊藤勇雄』 (桐々社: 2008年)」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』13, 岩手県立大学盛岡短期大学部: 113-4。